第３節　中原４号墳の埋葬と儀礼

田村 隆太郎

はじめに

富士市中原４号墳は、東駿河において初現期となる横穴式石室の古墳であり、多くの生産用具を含む特徴的で豊富な副葬品が注目される。

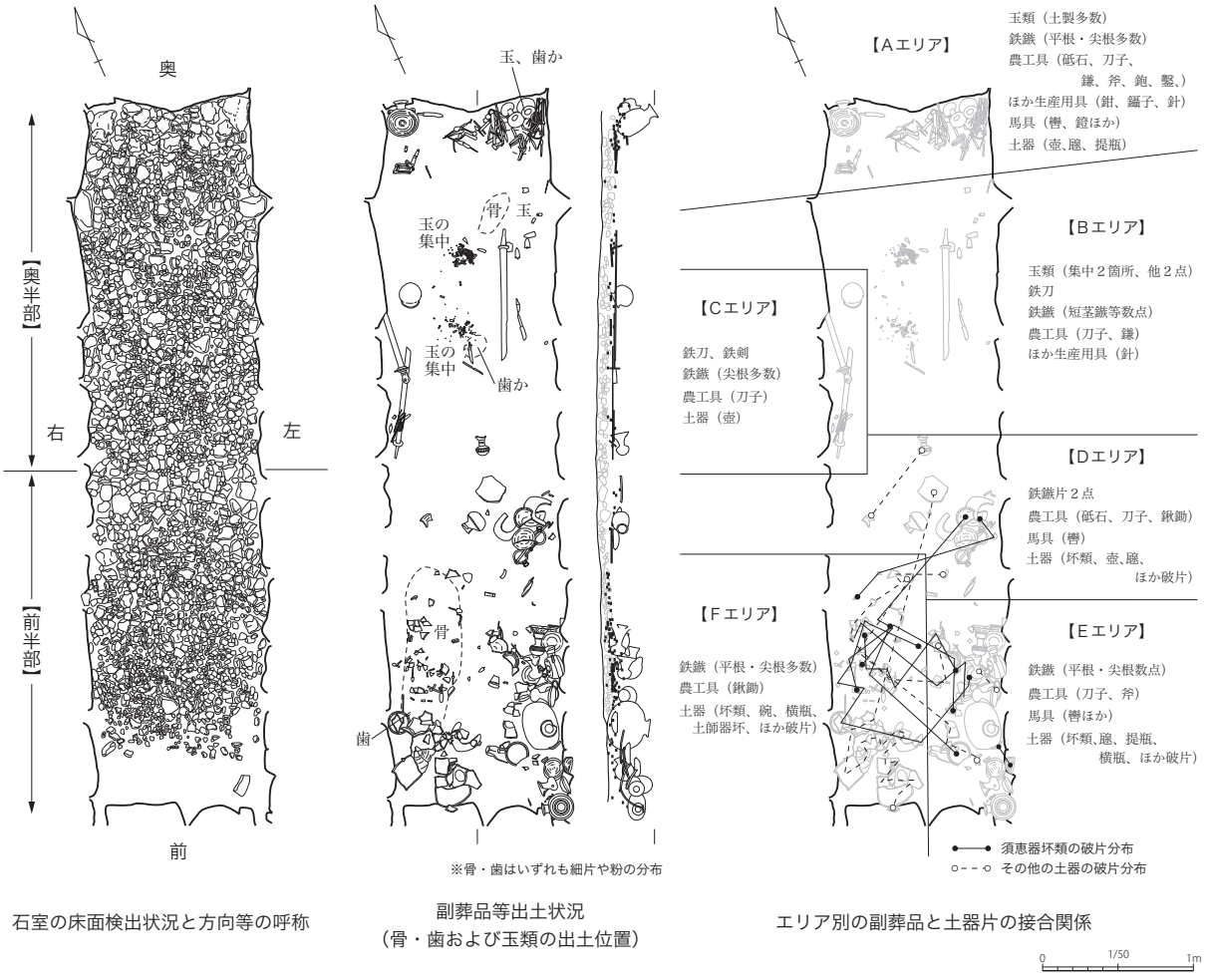
この石室内には、複数箇所の埋葬主体（埋葬された被葬者の存在）や片づけなどの痕跡が認められ、また、出土した武器などに若干の時期差を伴うことも指摘できる。したがって、複数回の埋葬があったと判断することができる。

ここでは、複数回に及ぶと判断できる埋葬とその他の儀礼的行為に関する諸状況を整理し、その特徴について考察したい。

１　埋葬等の復元

中原４号墳の横穴式石室には石棺がなく、木棺の痕跡や釘の出土、棺台などの特別な造作も認められない。床面は礫床１面であるが、石室中央に横断して大きめの石が用いられていることから、石室空間が奥半部と前半部に分けられていたことが指摘できる（註１、第168図）。

一方、盗掘や床面の破壊は認められず、副葬品などの出土状況は、古墳として機能した最終状態を良好に残しているといえる。また、良好な残存状態とはいえないが、埋葬された遺体と思われる歯や骨片の分布が数箇所で確認されている（註２）。そこで、これらの情報から埋葬等に関する復元を検討する（註３、第168・169図）。



石室の床面検出状況と方向等の呼称

副葬品等出土状況
（骨・歯および玉類の出土位置）

エリア別の副葬品と土器片の接合関係

第168図　石室内の状況と呼称

(1) 石室奥半部の埋葬主体

副葬品配置による復元　石室奥半部（B・Cエリア）では、玉類と刀剣の配置によって、その中央付近に埋葬主体の存在を把握することができる。

玉類は、前と奥の２箇所に集中域があり、いずれも埋葬時の位置に残されている状況が指摘できる。さらに、この玉類集中域の左右両側（Bエリア左寄りとCエリア）において、刀剣が石室主軸に沿って配置されていた。以上から、石室奥半部の中央付近に玉類を伴う埋葬主体があり、その傍らに刀剣類を配置したことが復元できる。

２つの埋葬主体　石室左側の大刀は切先を前に向けているが、右側の大刀と剣は切先を奥に向けている。さらに、両者を比較すると、右側の刀剣の方が新相の特徴を伴うことが指摘できる（本書第４章第６節、大谷論考）。右側の鏃群と奥壁寄りの鏃群との間にも同様の時期的傾向が認められ（本書第４章第７節、菊池論考）、右側の武器類は新しい時期に位置づけできる可能性がある。なお、奥壁寄りと前半部の２箇所にある馬具においても、同様の時期差を伴う可能性が指摘される（本書第４章第６節、大谷論考）。

以上から、この場所には時期の異なる２つの埋葬主体が存在した可能性を評価したい。一つは、やや奥寄りの左側の大刀を伴う埋葬主体であり（以下、「埋葬①」）、概ね６世紀後葉の初葬に位置づけることができる。もう一つは、やや前寄りの右側の刀剣を伴う埋葬主体であり（以下、「埋葬②」）、概ね６世紀末葉頃の追葬に位置づけることができる（註４）。

埋葬①と埋葬②の位置関係　刀剣は伸展葬された被葬者の傍らに配置されたと復元できるが、その切先方向が埋葬時の頭位に関係すると評価するならば、埋葬①は頭位を奥方向、埋葬②は頭位を前方向にしたと判断することができる。この判断にしたがうならば、奥半部の前寄りで確認されている歯については、埋葬②のものであったといえる。以上から、石室奥半部の２つの埋葬主体（埋葬①と埋葬②）は、近接もしくは一部重複する位置関係にあり、頭位は互いに逆（奥方向と前方向）にしていた可能性が高いと判断することができる。

なお、２つの玉類集中域については、時期差のある２つの埋葬主体によるものというよりも、同じ６世紀後葉の埋葬①における装着位置の違いを示す可能性が指摘される（本書第４章第５節、戸根論考）。したがって、埋葬①の遺体配置を反映している可能性が考慮される。

(2) 奥壁寄りの片づけと儀礼的行為

副葬品の片づけ　石室奥壁寄り（Aエリア）の左半には、土器・鉄鏃・馬具・生産用具といった副葬品が集積された状態で出土しており、片づけによって寄せ集められたことが確認できる。奥壁寄り中央の鉄鏃群がやや乱れ、馬具は右側にも散在的に出土していることから、それらの方向からの片づけを復元することができる。

この奥壁寄りの副葬品群は、いずれも初葬の時期に位置づけできるもので占められている。したがって、埋葬①の副葬品を片づけたものであり、埋葬②の前段階もしくは埋葬②に際して行われた可能性を評価することができる。なお、埋葬①の大刀とその周囲の鉄鏃などは、片づけの対象とならずに副葬位置に残されたということになる。

儀礼的行為の可能性　同じ奥壁寄りの左半では、玉類も確認されている。玉類は、集積された副葬品と重なる範囲に分布し、一部は壺の中からも出土している。また、これらは土製の玉を主体としており、奥半部中央の玉類集中域とは組成が異なる（本書第４章第５節、戸根論考）。したがって、儀礼的行為として土製の玉類が用意され、片づけられた副葬品の上に載せられた、もしくはばら撒いた可能性が考慮される。

さらに、壺の中からは歯の可能性がある小片も出土したとする遺物台帳の記載がある。この調査記録によるならば、その位置が石室奥隅であることから、埋葬遺体を二次的に移動した可能性を評価することができる。さらに、復元される埋葬①と埋葬②の位置関係が重なることから、追葬（埋葬②）の際に初葬（埋葬①）の遺体と副葬品への対処が意識され、副葬品を奥壁左隅に集積するような片づけを行い、その後に初葬者自体に手を加えた可能性も指摘することができる。

しかし、奥半部における埋葬遺体の残りは非常に悪く、埋葬①のみならず、追葬の埋葬②の遺体もほとんど消失している。また、壺の内容物についても、現在では骨であるかも判断し難い白色の細片しか確認できない。したがって、先述したような埋葬①を対象とした遺体の移動があったのかを検証することは難しい。一方、埋葬①に伴う可能性が指摘できる玉類集中域に大きな乱れはないことから、遺体の移動があったとしても、一部分に限られたと推測できる。

(3) 石室前半部の埋葬主体

骨片分布による復元　石室前半部では、その前寄り右半（Ｆエリア）に骨片の分布が確認されている。その範囲は石室主軸に沿った長さが約１ｍ、幅は0.4ｍ程である。骨片は細片化した状態になっているが、前寄りでは歯を確認している。なお、発掘調査では、この範囲を一度に検出したわけではなく、前寄り部分と中央～奥寄り部分を別々に把握している。検出高は前者の方がやや高い。しかし、一連の分布範囲を発掘作業エリアや高さに沿って二分した可能性も考慮される。したがって、埋葬主体の別を反映した検出であるかはわからない。

この骨片分布の下からは、散在した土器片が検出されており、鉄鏃についても同様の出土状況が把握できる。このことから、既に副葬されていた土器などが破壊され、ばらばらにされた後に遺体が置かれたと判断することができる。したがって、この遺体を初葬に位置づけることはできない。また、石室の出入口を占める場所にあることから、奥半部の埋葬①・②より前に埋葬されたとは判断し難く、それらから二次的に移動してきた可能性も評価できない。以上から、埋葬①・②とは異なる最後の埋葬であった可能性を評価したい（以下、「埋葬③」）。

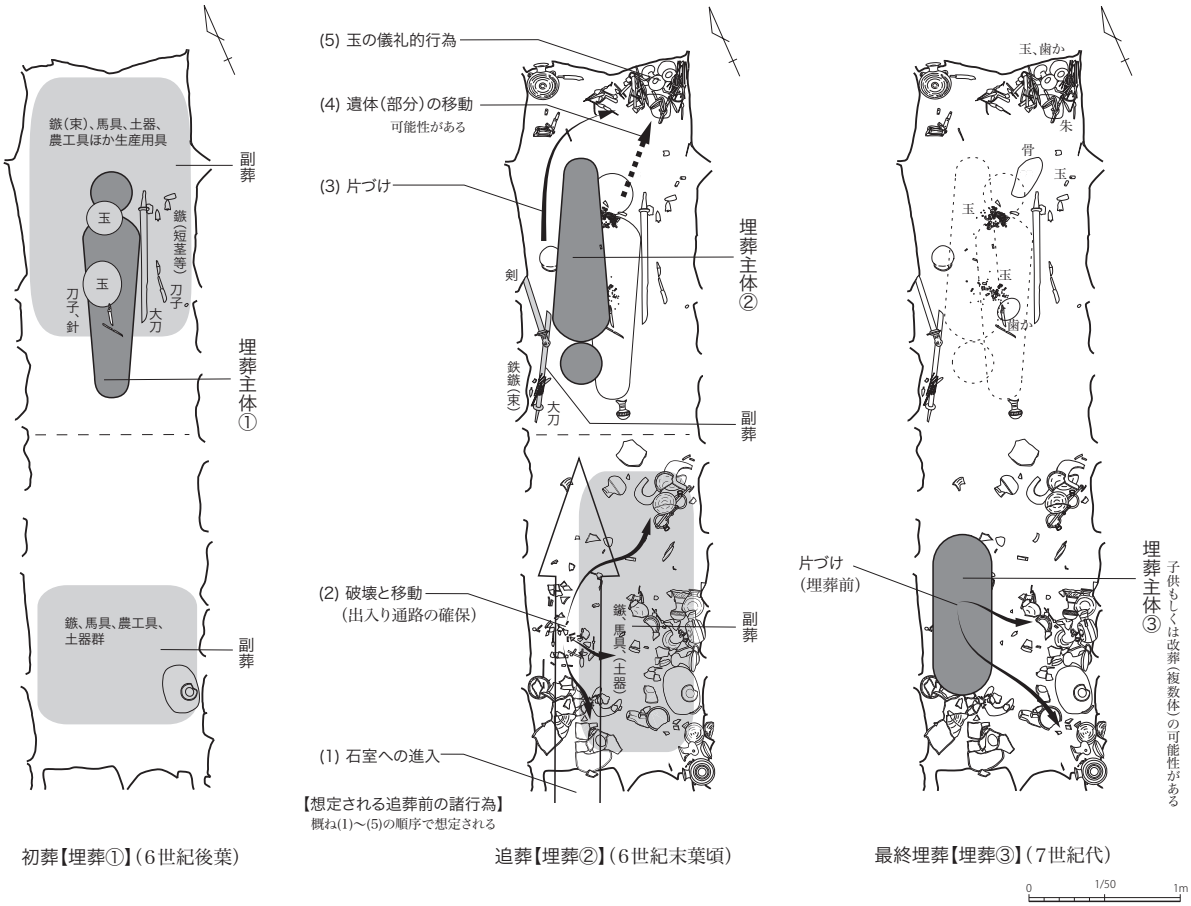
埋葬③の時期と埋葬方法　しかし、この古墳の出土遺物は、埋葬①か②に伴うことが明らかなものと、それらと同時期のもので占められている（本書第４章第５～10節）。したがって、この埋葬③には副葬品が認められず、時期を特定することは難しい。

また、この埋葬も伸展葬であれば、歯の出土位置から頭位は前方向にあると推測できる。しかし、骨片分布の範囲は全体でも長さ約１ｍと狭く、発掘調査で把握したように南部と中北部が別であるならば、さらに小さい範囲の埋葬が２つあったことになる。子供の埋葬である可能性も否定できないが、被葬者の装身具や傍らに置かれる刀剣などもないため、伸展葬とする根拠もない。

(4) 石室前半部における諸状況

副葬品の破壊と移動　石室前半部（Ｄ～Ｆエリア）については、左寄りに残存状態の良い土器が並ぶ一方、右半を中心に土器片や鉄鏃が散在している。

この土器片の接合関係をみると、ほぼ全ての個体が



第169図　埋葬等の復元

右半のＦエリアと左半のＤまたはＥエリアの間で接合する。さらに、Ｆエリアの土器片の方が小さく、出土レベルが低い傾向にある。以上から、右半（Ｆエリア）に置かれていた土器を破壊し、左側の各所（ＤエリアやＥエリア）へ寄せるような移動が行われ、結果としてＦエリアには小片が散在的に残るという過程を把握することができる。

鉄鏃については、土器のような接合は確認できないが、散在した出土状況である。Ｄエリアの農工具などについても、土器片と混在して出土していることから、同様に移動している可能性が考慮される。

左側に並ぶ瓹や提瓶は、坏類の多い右半のようには破壊されずに寄せられたと推測できる。副葬位置または器種に応じて、扱われ方に差異が生じたということになる。さらに、左側の横瓶は、床面に設置された状態にあり、副葬状態を保っている可能性が指摘できる。なお、この位置が礫床範囲の前端にあたることから、当初の副葬品はここから奥に配置されていた可能性が考慮される。

一方、右側の横瓶は大きく壊れており、前方の高い位置に多くの破片が分布している。副葬位置において破壊されたうえで、前方の入口寄りに堆積した土砂の上に敷き均された状況が把握できる。左前隅の坏・提瓶・瓹についても、床面にはなく、入口寄りに堆積した土砂の上に置かれた状況が確認できる。

破壊と移動の目的　副葬土器や鏃群が破壊されながら各所に寄せられ、破片が散在的に残されるという状況は、石室奥壁寄りの片づけに比べると乱雑さが見受けられる。先葬の副葬品を周到に集積する片づけとは明らかな違いがあり、異なる目的を指摘することができる。すなわち、埋葬のためというよりも、石室の奥へ出入りする通路を確保するために行われた可能性を評価したい。

このように考えれば、この副葬品の破壊と移動は、埋葬③のためではなく、例えば埋葬②に際して行われ、結果的に空間になった部分が埋葬③の埋葬場所になったと把握することができる。

副葬および破壊と移動の過程　石室前半部の鉄鏃の中には、初葬の時期に位置づけ難いものもある（本書第４章第７節、菊池論考）。また、Ｄエリアの轡は初葬の副葬品が移動したものと判断できるが、Ｅエリアの轡は追葬の時期に位置づけられる（本書第４章第６節、大谷論考）。農工具は初葬のもので占められる可能性が評価でき（本書第４章第８節、鈴木論考）、土器も初葬と追葬に分けて把握することが難しく、多くは初葬の可能性が評価されるが、一部に新相も確認できる（本書第４章第９節、和田論考）。以上から、前半部には初葬（埋葬①）において多くの土器や鉄鏃、馬具、農工具を副葬したほか、追葬（埋葬②）においては少数の土器や鉄鏃、馬具を副葬したことが指摘できる。

さらに、追葬に伴う鉄鏃も散在した状態で出土しており、Ｅエリアの轡は瓹の下から出土している。鉄鏃の出土状況については、副葬方法や矢柄の腐蝕によって混在した可能性もあるが、轡の出土状況は、追葬（埋葬②）に伴う副葬より後に土器（瓹）の移動が行なわれたことを示している。

少なくとも大きな破壊と移動については、先述のとおり石室の奥への出入りを目的として、埋葬②に際して行われた可能性を評価したい。一方、埋葬②より後の土器等の移動が確認できることについては、埋葬③に伴う片づけとして多少の副葬品の移動もあった可能性を評価したい。なお、埋葬①～③のほかに、埋葬主体等に何らかの処置を行った別の機会を想定することもできるが、本墳においては推測の域を出ない。

２　埋葬方法に関する特徴

復元した３つの埋葬主体については、いずれも被葬者自体が良好に残存しているわけではないため、埋葬方法の詳細を特定することは困難である。また、駿河地域では多くの古墳が同様の状況にあり、埋葬習俗の詳細を体系的に把握するには課題も多い。そこで、ここでは以下の２点について注目し、埋葬方法に関する可能性について触れておきたい。

(1) 埋葬②の頭位について

切先を奥に向ける刀剣　横穴式石室の主軸に沿って埋葬する場合、頭位を奥方向とし、傍らに副葬する刀剣は切先を脚側（石室前方）に向けるのが一般的な埋葬方法として認識される。しかし、埋葬②に伴う石室奥半部右側の刀剣は、切先を奥に向けている。

静岡県内の横穴系埋葬施設における刀剣の配置をみると、前述のとおり切先を前方に向ける場合が多いが、石室主軸に直交または斜交する場合や石室壁面に立て掛ける例があるほか、埋葬②の刀剣のように切先を奥に向ける例も少数ながら確認することができる（第９表）。

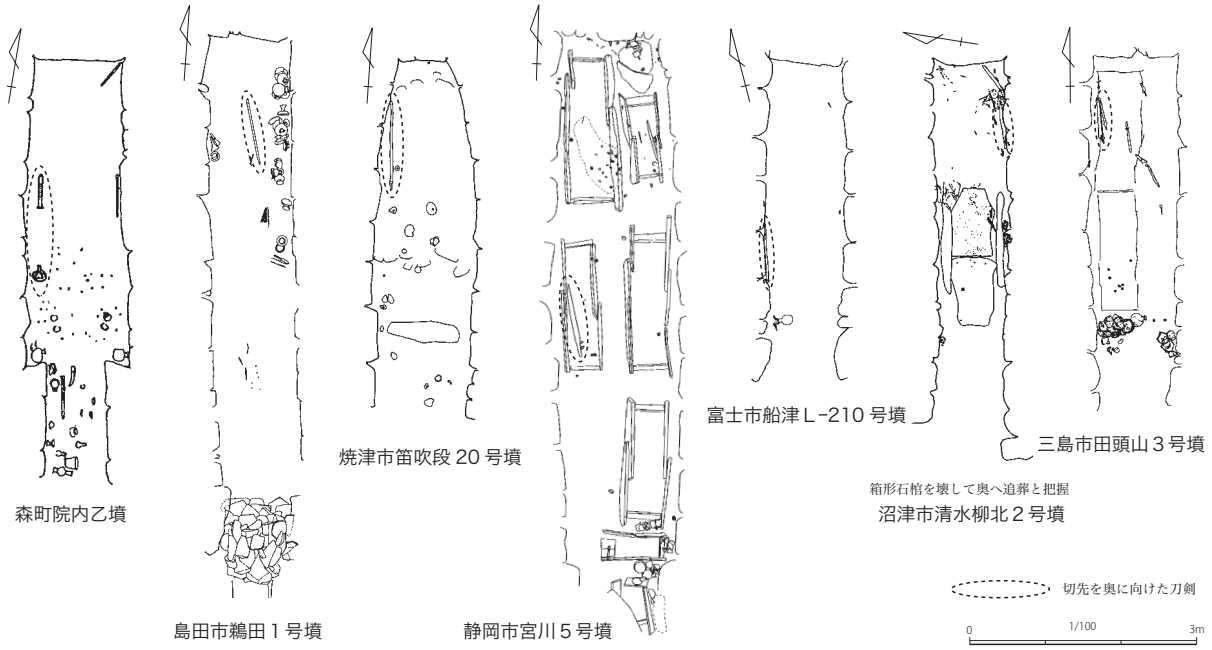
その分布をみると、三島市田頭山古墳群や沼津市清水柳北古墳群、そして本古墳群に複数例が確認できるが、特定の地域や時期に偏るとまではいえない（註5）。また、埋葬①でも確認できるように、同じ古墳や古墳群の中に切先を石室前方に向ける場合もあることから、古墳群などにおいて踏襲された方法であったとも評価できない。少なくとも東海地方東部では、広く少数派の埋葬方法として用いられたということになる。

なお、これらの刀剣は右側に配置されるものが多く、さらに、追葬に伴うとされる場合が目立つ。しかし、埋

第９表　静岡県の切先を奥に向ける刀剣副葬例

市町	名称	築造時期	墳丘 形	墳丘 規模 m	埋葬施設	切先を奥に向ける副葬 副葬位置	切先を奥に向ける副葬 刀剣	備考	文献
磐田市	押越５	A	円	8	横穴式石室（擬似両袖）	前寄り　左側	無窓鍔付大刀１		豊岡村 1983
森町	院内乙	A	円	12	横穴式石室（両袖）	中央　右側	環頭大刀１		森町 1998
森町	谷口ＥＩ２	A	-		横穴墓	奥寄り　右側	無窓鍔付大刀１		森町 1996
袋井市	地蔵ヶ谷 10	B	-		横穴墓	中央　右側	六窓鍔付大刀１、無窓鍔付大刀１		袋井市 2004
袋井市	道ヶ谷 B2	A	-		横穴墓	中央　右側	鍔付大刀１、大刀１		袋井市 1997
掛川市	居村１	B	円	17	横穴式石室（擬似両袖）	奥寄り　左側	無窓鍔付大刀１		静岡県 1997
牧之原市	大寄 C6	A	-		横穴墓	前寄り　左側	無窓鍔付大刀１、大刀１		相良町 2000
島田市	水掛渡 A14	A	円	？	横穴式石室（無袖）	奥寄り　右側	無窓鍔付大刀１		遠江考 1965
島田市	駿河山２	B	円	10	横穴式石室（無袖）	奥寄り　右側	無窓鍔付大刀１	追葬と把握	金谷町 1983
島田市	鵜田１	A	不明		横穴式石室（無袖）	奥寄り　左側	大刀１		島田市 1978
藤枝市	衣原 11	A	不明		横穴式石室（両袖）	中央　右側	八窓鍔付大刀（象嵌）１		静岡県 2010
藤枝市	横添板沢２	B	不明		横穴式石室（無袖）	奥寄り　右側	無窓鍔付大刀１		岡部町 1982
藤枝市	本郷 31	A	円	10	横穴式石室（無袖）	奥寄り　左側	六窓鍔付大刀１		岡部町 1981
焼津市	笛吹段 20	B	円	7	横穴式石室（無袖）	奥寄り　右側	八窓鍔付大刀１		駿府博 1984
静岡市	宮川５	A	不明		横穴式石室（無袖）	中央　右側	八窓鍔付大刀（象嵌）１	追葬と把握	静岡市 2011
静岡市	伊庄谷６	A	-		横穴墓	中央　右側	無窓鍔付大刀１、大刀２		望月他 1963
静岡市	伊庄谷 B8	A	-		横穴墓	中央　中程	無窓鍔付大刀１		静岡県 1984
静岡市	神明４	A	円	18	横穴式石室（擬似両袖）	中央　右側	環頭大刀１		清水市 2002
富士市	中原３	A	円	8	横穴式石室（無袖）	中央　右側	無窓鍔付大刀１	左側小刀も切先奥	本書
富士市	中原４	A	円	11	横穴式石室（無袖）	奥寄り　右側	六窓鍔付大刀１、六窓鍔付剣（象嵌）１	追葬と把握	本書
富士市	船津 L210	B	円	8	横穴式石室（無袖）	前寄り　右側	無窓鍔付大刀１		富士市 1999
沼津市	石川１	A	円	8	横穴式石室（無袖）	中央　左側	無窓鍔付大刀１		沼津市 2006
沼津市	平沼吹上２	A	円	15	横穴式石室（無袖）	中央　右側	八窓鍔付大刀１		沼津市 1985
沼津市	清水柳北２	A	円	10	横穴式石室（無袖）	奥寄り　左側	大刀２	追葬と把握	沼津市 1990
沼津市	清水柳北３	A	円	9	横穴式石室（無袖）	中央　左側	大刀１		沼津市 1990
三島市	田頭山１	B	円	12	横穴式石室（無袖）	中央　右側	大刀１		静岡県 2004
三島市	田頭山３	A	円	11	横穴式石室（無袖）	奥寄り　右側	無窓鍔付大刀（象嵌）１、無窓鍔付大刀１	左側に別の刀あり	静岡県 2004

名称は「号墳」「号横穴」などを省略している。
時期は、概ね７世紀初頭以前を「A」、７世紀前葉以降を「B」としている。



第 170 図　静岡県の切先を奥に向ける刀剣副葬例

葬の数や順序などが正確に把握し難い古墳も少なくない。また、清水柳北２号墳のように、追葬と判断されるが左側に切先奥方向の刀剣を配置する例もある。したがって、傾向として指摘できる可能性はあるが、決められた方法という評価は難しい。

逆頭位の評価　刀剣の向きで頭位を判断するならば、これらの頭位は石室前方にあり、多くの場合とは逆頭位になる。また、本墳の場合は、初葬（埋葬①）との関係においても逆頭位の追葬ということになる。

岩松保は、古墳時代前・中期における埋葬と儀礼について、人骨が良好に残る石棺等の事例を分析し、棺内に複数の伸展葬がある場合（Ⅰ類）や改葬や集骨が認められる場合（Ⅱ・Ⅲ類）があり、九州地方北部から近畿地方西部にかけて追葬の風習が広がっていたことを明らかにしている（岩松 2010）。さらに、Ⅰ類において狭い棺内に先葬者と追葬者が上下に重なる場合が多いことから、集骨には単に追葬スペースを確保するためではなく、儀礼的・象徴的な理由があったと論じている。

そして、Ⅰ類における先葬者と追葬者の頭位について、順・逆があることについても言及している。このことについても、狭い棺内で機能的に並べるためではなく、出自の異同などを含めて（註 6）、何らかの象徴的・儀礼的な意味が付与されていた可能性を評価している（岩松 2010）。本墳などの状況を説明するには後期古墳の検討を加える必要があるが、こうした埋葬習俗が横穴系埋葬施設の出現と伝播、導入を経て反映されているという可能性も考慮したい。

（2）埋葬③の埋葬方法について

最終埋葬の改葬の可能性　最終埋葬に位置づけた埋葬③は、石室の前寄りに位置し、副葬品が認められない点で埋葬①・②とは顕著な違いをもつ。土器片や鉄鏃が散らばった状態の上に置かれている点も、特徴的である。さらに、埋葬①・②に比べて骨が残りやすい状態にあった可能性も考慮される。

この埋葬方法について、歯の出土位置から頭位を前方に向けていたと推測することもできるが、先述のとおり伸展葬ではなかった可能性も考慮される。そこで、一つの案として改葬について考えておきたい。

東駿河の改葬例　遠江の横穴墓には人骨が残る場合が多く、大谷宏治や松井一明の研究によって、７世紀以降に改葬が一般化したことが解明されている（大谷 2001・2012、松井 2004）。ただし、全てが改葬になるとは限らず、地域的な導入状況の差異もあると指摘されている。東駿河地域の状況は把握されていないが、改葬の可能性が指摘できる事例はいくつか存在する。

長泉町原分古墳は、大型の横穴式石室を埋葬施設とする径 17 m程の円墳であり、金銅装馬具や装飾付大刀など豊富な副葬品が出土している。初葬は家形石棺、追葬は釘付木棺による埋葬主体が復元できるが、人骨は、それらとは別に４体分が残存していた。しかも、土器片や鉄鏃の上で検出されている。それぞれの人骨は部分的な骨格に限られており、集積状態や獣骨の混在も認められることから、最終埋葬における改葬の可能性を評価することができる。初葬は７世紀初頭であるが、改葬には土器が伴っており、７世紀末葉に位置づけることができる（静岡県 2008）。

富士市須津Ｊ -159 号墳は、横穴式石室を埋葬施設とする径約 14 mの円墳である。盗掘などは認められず、石室全体から３～４体分の人骨が検出されている。骨の残存状態が決して良くないことから、詳細な判断は難しい。しかし、集積した状態が各所で確認できる一方、伸展葬が認められないことなどから、改葬の可能性も評価される。築造時期は７世紀初頭から前葉であり、７世紀後葉までに少なくとも２回の追葬が行われた可能性が指摘できる（静岡県 2010a）。

本墳の場合は、これらのような検討もできない残存状態であるが、埋葬③は入口寄りに位置し、他の埋葬①・②に比べて骨が遺存していること、先葬の副葬土器や鉄鏃の破片の上に置かれていることなど、原分古墳の改葬例に似た状況を確認することができる。

３　儀礼に関する特徴

（1）諸行為における儀礼的要素

石室内の埋葬やその他諸行為には、多くの儀礼的要素を指摘することができる。埋葬方法には死に対する観念が反映されていることが推測でき、前項では追葬における逆頭位と最終埋葬における改葬の可能性を指摘した。また、奥壁寄りの片づけに伴う玉類による儀礼的行為、遺体の移動に関する可能性にも触れた。

副葬行為においても、Ｂエリアで短茎鏃等が散在している状態については、古墳時代前・中期から類例が多く認められ、矢束の副葬とは異なる儀礼的意味や象徴性

をもつものと指摘されている（鈴木 2000 など）。また、石室前半部の副葬品の破壊については、出入り通路の確保を目的とした行為として評価したが、愛媛県松山市葉佐池古墳（松山市 2003）における遺体と副葬品等の顕著な毀損行為で指摘されているような、再生阻止や社会的死（田中 2013 など）といった観念的な側面も内在している可能性は考慮される。

（2）副葬土器群の特徴

土器の副葬　静岡県内における土器の副葬は、一部の地域では古墳時代中期の木棺直葬にも認められるが、多くは後期の横穴式石室や横穴墓に伴って普及する。このことは、古くから副葬品として扱われてきた武器などとは異なり、被葬者の所有もしくは社会的に属する品というよりも、葬送儀礼との関係が強いものと評価される。とくに、埋葬主体から離れた場所の個体数の多い土器群は、葬送儀礼用の飲食器であり、何らかの死生観に基づいて墓室内に持ち込まれたものと把握される。

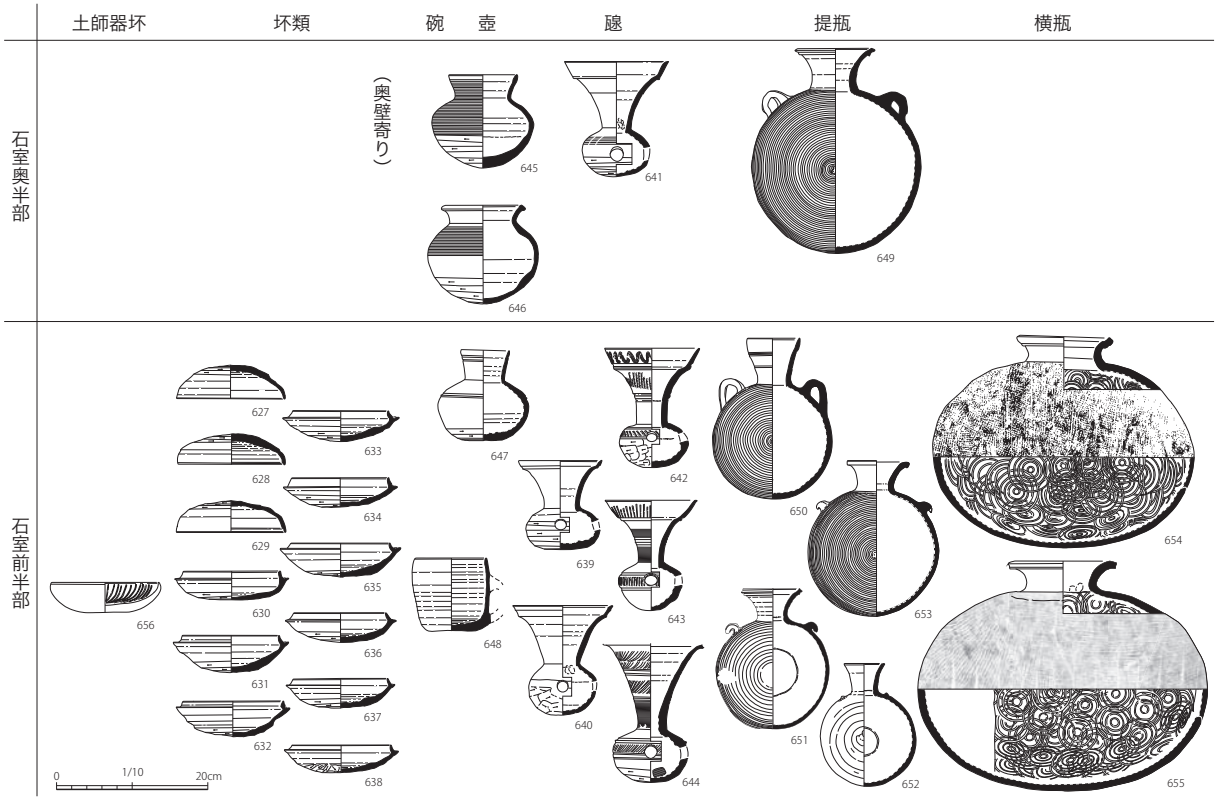
本墳では、多くの土器が石室内の出土であり、とくに須恵器は石室内に限定される。儀礼に用いた土器群を墓室内に副葬するという所作と観念も含めて、新たな横穴式石室の墓制が用いられたと評価することができる。

副葬土器群と埋葬の関係　土器の出土状況をみると、埋葬主体の近くには瓹と壺瓶類が副葬され、埋葬主体から離れた石室前半部には坏類と瓹、提瓶が数個体ずつ配置され、さらに碗、横瓶、土師器の坏が加わる（第 171 図）。

副葬土器は概ね、初葬に相当する 6 世紀後葉を中心としたなかに位置づけられるが、複数ある瓹や提瓶については、古相を示す形態のものと新相を示す形態のものが含まれる。しかし、その差異は個体ごとに認められ、さらに胎土等の違いもあるため、初葬と追葬に二分することは必ずしも容易ではない（本書第 4 章第 9 節、和田論考）。

奥壁寄りの土器群については、ともに集積された鉄鏃や馬具、生産用具が初葬に伴う副葬品であると評価でき、同様のものと考えたい。一方、前半部の土器群については、初葬と追葬の両方の副葬が含まれている可能性があるが、形態や胎土等のバラエティーに加えて、出土状況も混在する。正確に整理することは難しい。

先述のとおり、初葬の埋葬主体（埋葬①）と追葬の埋葬主体（埋葬②）は、非常に近い位置関係にある。2 個体の横瓶をそれぞれの副葬に対応させ、瓹や提瓶など



第 171 図　中原 4 号墳の副葬土器群

もほぼ等分することで、類似した２つの土器群を推測することも可能かもしれない。しかし、土器群を一つの墓室における葬送儀礼の諸行為によるものと考えれば、被葬者ごとに属する武器などとは異なる把握も考慮される。とくに一箇所に集め置かれた土器群については、その多くが一つの葬送儀礼（供献等）によるもので、その後に加わるのは別の性格、例えば呪的逃亡による数個体程度であった可能性なども考えられる。いずれにしても、様々な形態的特徴と胎土等を含むことから、多様な生産と入手過程によって豊富な土器群を実現させた点を評価し、次に器種組成の特徴を検討したい。

豊富な器種組成と脚付器種の欠如　本墳の副葬土器群の器種組成は、「土師器の坏と須恵器の坏類・碗・瓹・壺・提瓶・横瓶」となる。副葬土器の器種組成については、白澤崇が三重県・静岡県の群集墳や横穴群を中心に分析している（白澤 2001 他）。その成果によれば、本墳の副葬土器群は「坏類＋壺類＋瓹＋α」という最も豊富な組成に該当し、優位性の高い被葬者に伴うものと評価することができる。

一方、器台や脚付壺のほか、高坏も含めて脚付器種を

第 10 表　駿河の７世紀初頭以前における馬具副葬古墳の土器群

市町	名称	墳丘 形	墳丘 規模 m	埋葬施設	副葬土器群 須恵器 坏身	坏蓋	高坏	脚付碗等	碗等	瓹	壺	脚付壺	子持器台	提瓶	平瓶	フラスコ瓶	横瓶	甕	土師器 坏碗類	高坏	脚付壺等	壺瓶類	鉢	馬具	装飾付大刀	備考	文献
島田市	波田１	円	13	石室	3	2	1	1	1	1				2					7			2		○			島田市 1980
島田市	駒形１	円	18	石室	3	1		1	1					1	2									○			静岡縣 1930
藤枝市	八幡２	円	?	石室	13	10	10			3	4	2		3					1					●			藤枝市 2007
藤枝市	衣原 11	不明		石室	6	3	4		1	1	1			2		2	1		10	5		5	1	○	○		静岡県 2010
藤枝市	瀬戸１	円	13	石室	35	31	5	1	2	4	4			1	7	2			3	1				○			西駿考 1968
藤枝市	瀬戸２	円	9	石室	6	4	1		1		1						1							○			西駿考 1968
藤枝市	瀬戸３	円	11	石室	30	24	7			3	3			1	3	2			1					○			西駿考 1968
藤枝市	釣瓶落７	円	14	石室	3	1				1	1			1										○			静岡県 1975
藤枝市	本郷 31	円	9.8	石室	4	2				1	1				2									○	●		岡部町 1981
静岡市	佐渡山２	方	32	石室	3		4			1			1					2						○	●	撹乱顕著	静岡市 1984
静岡市	楠ヶ沢３	方	17	石室	12	10	4		1	3	6	5		1	2			11	1			1		○		撹乱顕著	静岡市 1985
静岡市	賤機山	円	32	石室	12	11	24	1		3		2		4	2		1					1		●	● ○	※	後藤他 1953
静岡市	駿河丸山	方	18	玄室	12	11	10			3	1	2		3	5									○	○	羨道 :7 世紀	静岡市 1962
				羨道	20	29	8			6	2	3			5	2											
静岡市	小鹿山ノ神	方	23	石室	3		1								1									●			静岡縣 1930
静岡市	小鹿堀ノ内山４	円	12	石室					3	1					1									○			静岡市 1967
静岡市	伊庄谷南谷６	-		横穴墓	3	3	5			1	2			2					7	3		1		○			静岡市 1963
静岡市	伊庄谷南谷 23	-		横穴墓	1	1			2					1	1				2					○			静岡県 1984
静岡市	宮川５	不明		石室	15	16	4		1	3	1				5	1	1		4	2		1		○	○		静岡市 2011
静岡市	上中林	不明		石室				1	1		1			2				1						○			静岡大 2007
静岡市	下中林２	円	20	石室	1	3	5					1		1	2	1	2		1					○			静岡大 2007
静岡市	神明４	円	18	石室	1	1						1			1	1								○	●		清水市 2002
静岡市	東久佐奈岐３	不明		石室	1	1	3		1						1			1						○	○		清水市 1984
静岡市	尾羽西山３	円	15	石室			1				1				1						2			○			静岡市 2010
静岡市	室ヶ谷１	不明		石室	1	1				1				2	1									○	●		由比町 1985
静岡市	室ヶ谷３	円	16	石室	8	3	2			1	1			4	1	2		1						○	●		由比町 1985
富士市	横沢	円	16	石室	12	12	2			1				1		1		1						○			富士市 1981
富士市	東平１	円	13	石室																				●	○		富士市 1990
富士市	中原４	円	11	石室	9	3			1	6	3			5			2		1					○	○		本書
富士市	中里大久保	円	12	石室						1				2	1				1					○	●	土器 :7 世紀	富士市 1988
沼津市	荒久城山	円	?	不明	1	1				1	1													●			沼津市 2002
沼津市	東原１	円	15	石室																				○			加藤学 1972
沼津市	東原２	円	14	石室							1													○			加藤学 1972
沼津市	石川 119	円	10	石室						1				1	2		2							○	●		加藤学 1976
沼津市	東本郷３	円	?	石室	1						1			3		1		1	1					○	●		沼津市 2002
長泉町	本宿上ノ段２	円	14	石室		1	2							1	1	1			1					○			沼津考 1970
長泉町	上出口１	不明		石室	2	2																		○			長泉町 1974
三島市	願塚	不明		石室	3	2	1		2	3				2					4					○			三島市 1958
三島市	夏梅木６	円	11	石室				1						1				1						○	●		三島市 2000

名称は「号墳」「号横穴」などを省略している。
「石室」は、横穴式石室である。
副葬土器群は、初葬・追葬の混在を含む可能性がある。
馬具は、金銅装の轡・杏葉・鞍・鐙のあるものを●、ないものを○としている。
装飾付大刀は、金銅装飾を●、鉄柄頭・象嵌を○としている。
※ 賤機山古墳は静岡市による発掘調査も行われている。
前田 2007 によれば、賤機山古墳出土須恵器には坏身 16、坏蓋 17、高坏 31、脚付盌 1、盌 2、瓹 5、脚付壺 2、提瓶 6、平瓶２がある。

全く含まないという特徴が確認できる。脚付器種については、横穴式石室の導入と関連して長脚化するという変遷が指摘されており（藤原 1985）、さらに、各地の後期古墳における土器群の分析によって、とくに器台や脚付壺の有無は階層秩序と対応することが指摘されている（寺前 2005、三原 2013、田村 2014）。

本墳と同じ駿河の 7 世紀初頭以前の馬具副葬古墳をみると（第 10 表）、子持器台や脚付壺をもつ古墳は、墳丘規模や副葬品内容において明らかに本墳より上位にあるといえる。すなわち、本墳の副葬土器群は、先述のとおり群集墳を含めた全体の中では優位性が高いと評価できるが、そのレベルを超えた首長墓の要素までは伴っていないということになる。

ただし、高坏については、上位階層に多い傾向はあるものの、本墳と同じか下位に位置づけられる古墳にまで副葬が認められる（第 10 表、第 172 図）。階層秩序だけではなく、脚付器種を求めないような本墳特有の性質が内在している可能性も考慮される。

瓹の多い組成　本墳の副葬土器群のうち、最も多いのは坏類であるが、それに次ぐのが 6 個体もの瓹である。先述の白澤崇の研究では、瓹について、その希少性と「注ぐ」機能に特化した器種であることに注目し、また、基本的に土器群中に 1 ～ 2 個体しか含まないことを指摘して、器種組成の頂点に位置づけられるものとして評価している（白澤 2001 他）。

第 10 表をみても、瓹は 1 個体の場合が多く、ほとんどは 3 個体以下である。5 個体以上の瓹を含む副葬土器群（註 7）となると、静岡県内では本墳のほかに、6 世紀の首長墓である静岡市賤機山古墳に可能性があるほか、7 世紀代の静岡市駿河丸山古墳の羨道や同牧ヶ谷 2 号墳（静岡市 1983）に確認できる程度である。

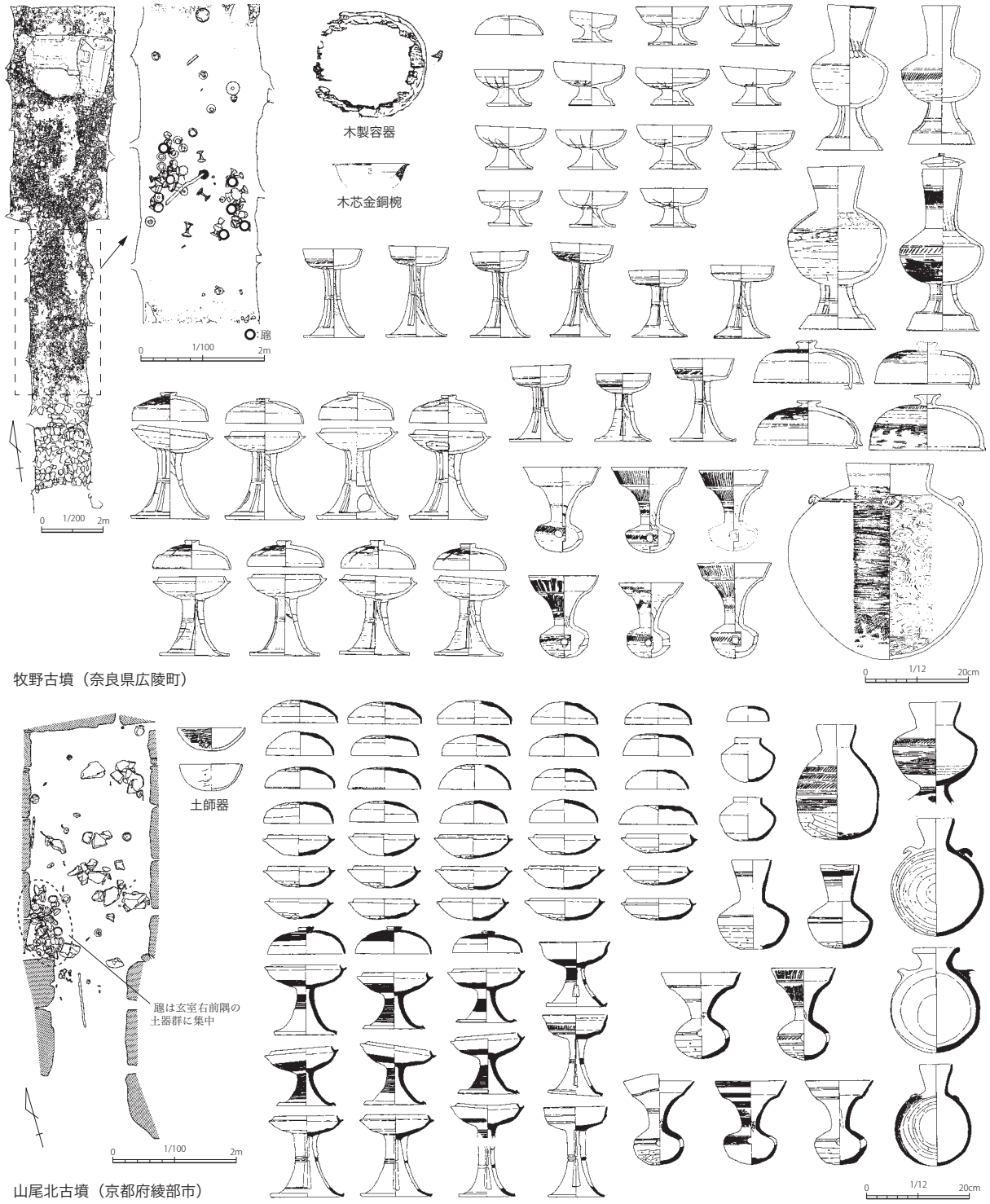
大和（奈良県）の有力古墳の中では、平群町三里古墳（奈良県 1977）や葛城市平林古墳（奈良県 1994）、広陵町牧野古墳（奈良県 1987、第 173 図）などにおいて、5 個体程度の瓹を確認することができる。しかし、斑鳩町藤ノ木古墳（奈良県 1993）では 3 個体、高取町市尾墓山古墳（奈良県 1984）や平群町烏土塚古墳（奈良県 1972）、葛城市二塚古墳（奈良県 1962）では 2 個体である。一方、中小規模の古墳でも大半が 3 個体以下であるが、径 15 m の円墳である御所市吐田平 2 号墳（網干 1961）に 6 個体の瓹を確認することができる。

その他の近畿・東海地方においても、5 個体以上の瓹の副葬は、径 20 m程度の円墳で装飾付大刀や馬具をもつ京都府京丹後市湯舟塚 2 号墳（久美浜町 1983）や大阪府八尾市芝塚古墳（八尾市 1993）、岐阜県池田町南高野古墳（岐阜県 2000）にある一方、墳丘規模・副葬

第 172 図　駿河の比較例（近い時期・階層の古墳）

品ともに劣る京都府綾部市山尾北古墳（綾部市 1997、第 173 図）や同市キツネ塚古墳（綾部市 1998）、滋賀県米原市黄牛塚古墳（滋賀県 1976）、愛知県名古屋市東谷 12 号墳（名古屋市 1969）にも認められる。なお、その他の地方においてもほとんど例はないものとみられ、いずれの地域や階層においても少数例として把握することができる。

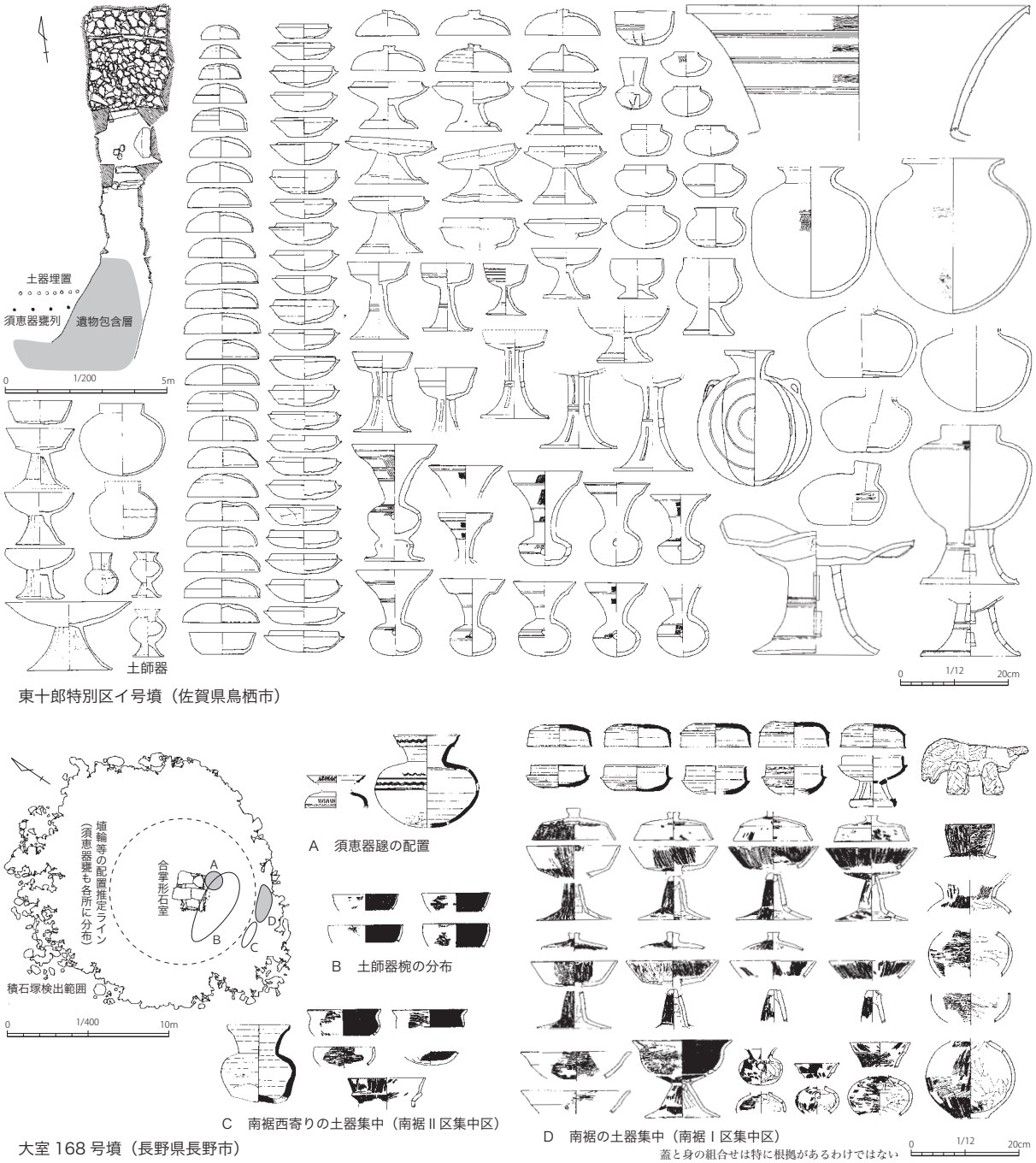
墓室外における璧の多用　福岡県岡垣町東田 11 号墳（岡垣町 1977）の墳丘盛土中や佐賀県鳥栖市東十郎特別区イ号墳（佐賀県 1966、福岡大学 2003）の羨道前では、9 個体以上の璧を含む多くの須恵器が集中して出土している（第 174 図）。いずれも 6 世紀後葉の横穴式



第 173 図　璧を多く含む副葬土器群（近畿地方の事例）

石室墳であるが、石室内からの土器の出土はほとんどなく、これらは墓室外の土器群である。前者は、玉類と鉄製武器、刀子、鉋の副葬に限られるが、古墳群の中で最も大きな規模の古墳であり、最高所に位置する。後者も古墳群の中で最も大きな古墳であり、群形成初期に位置づけられる。さらに、馬具や農工具、あてびしなどの出土が注目される。後期群集墳の契機となる古墳において、瓌の多用を含む特徴的な儀礼が行われた可能性も考慮される。

一方、古墳時代中期について、筆者は静岡県森町円田丘陵の古墳群における木棺直葬墳の供献土器群に注目し、6 個体程度の土師器高坏に土師器壺と須恵器甕が加わる共通した器種組成を確認している（田村 2008）。さらに、近畿から関東地方の広い範囲に類例が確認できることから、葬送儀礼の共有化の背景として、初期群集墳の東日本への展開と関係する可能性を指摘した。そ



第 174 図　瓌を多用する葬送儀礼の土器群

して、この土器群には、1～2個体の須恵器瑳が加わる場合が少なくない（三好1997、白澤1998他、田村2008）。

しかし、筆者が指摘した器種組成の共通性は、必ずしも全国各地の全ての古墳に強く踏襲されたということではない。古屋紀之は、信濃の諸例について分析し、田村が確認した様相との関係性に触れながら、異なる志向性を持った土器群の展開を指摘している（古屋2008）。そして、その中の長野市大室168号墳や諏訪市一時坂古墳第4集中では、3個体を超える土師器の瑳を確認することができる。大室168号墳では、2個体の須恵器瑳を合掌形石室の近くに配置する一方で、南裾の土器群中に3個体を超える土師器瑳を用いており、瑳の多用の可能性が把握できる（第174図）。新来的な須恵器の瑳のあり方に対して、各地で生産しやすい土師器において瑳の多用が指摘できる点に注目したい。

瑳の多用の背景　先述したように、瑳を含む副葬土器群は比較的上位の階層にあるといえるが、その多用は必ずしも階層秩序と対応していたとは評価できず、また少数派である。畿内系石室を頂点とした横穴式石室の土器副葬の普及だけでは説明できず、そうした政治権力的な志向性とは違った側面を象徴するものと考えたい。

ただし、その類例は地域的にも広く点的に確認される状況にあり、特徴的な副葬品や埋葬施設構造の共通点も明確ではない。したがって、特定の地域や集団のつながりは評価し難く、具体的な説明は課題である。本墳の場合は、農工や鍛冶などの生産用具と一部の鉄鏃形態に大きな特徴があり、それらが示すような生産活動と関連した性格が考えられる。群集墳の契機として、その特徴的な志向性が影響し、瑳を多用した葬送儀礼が行なわれた可能性を考えることもできる。それぞれの発現の経緯は個別的であろうが、一つの可能性ある要因として、地域生産との関わりを考えたい。

なお、類例のほとんどが6世紀末葉頃までに位置づけでき、本墳もその範囲内にある。しかし、駿河の静清地域では、先述のとおり賤機山古墳から駿河丸山古墳や牧ヶ谷2号墳まで、7世紀に至る瑳の多用を少数ながら確認することができる。須恵器の地域生産が指摘される時期において、地域性としての瑳への志向が生じている可能性も推測することができる。

4　まとめ

埋葬の復元　本稿では次の埋葬主体を復元した。

埋葬①　石室奥半部の左寄り

埋葬②　石室奥半部の右寄り

埋葬③　石室前半部の右半前寄り

副葬品の編年的位置などによって、埋葬①は6世紀後葉の初葬、埋葬②は6世紀末葉頃の追葬に位置づけた。一方、埋葬③には副葬品が認められなかったが、先葬の副葬品の上に置かれることなどから、7世紀代の最終埋葬に位置づけでき、さらに、東駿河の諸例も参考にして改葬の可能性を指摘した。

埋葬①と埋葬②は、その時期が近いだけではなく、位置関係も近接もしくは一部重複しており、さらに、頭位を互いに逆にする関係（逆頭位）にある可能性を指摘した。そして、古墳時代前・中期の西日本に確認できる石棺埋葬の研究成果を参考にして、被葬者間の性格等に起因した何らかの象徴的意味をもつ埋葬方法であり、こうした埋葬習俗が横穴式石室の出現と伝播、導入を経ながら反映している可能性を考えた。

片づけと破壊等の行為　石室の奥壁寄りでは、副葬品の片づけが確認でき、埋葬②に際して埋葬①の副葬品を片づけた可能性を評価した。さらに、それらの上に検出した玉類などについて、追葬に際したスペースの確保というだけではなく、先葬に対する儀礼的行為が行われた可能性を評価した。

石室前半部では、奥壁寄りの片づけとは異なる副葬品の散在状態が確認できることから、埋葬③に際しての片づけだけではなく、その前の追葬（埋葬②）において、石室の奥へ出入りするための破壊と移動が行われた可能性を評価した。なお、この毀損行為にも社会的死を意図した儀礼的側面が内在している可能性を指摘した。

副葬土器群からみた特徴　葬送儀礼の特徴を示す要素として、副葬土器群の器種組成について検討した。階層性に関しては諸研究を参考にして、比較的優位な階層にある器種組成として評価できるが、首長墓の儀礼には劣るものと位置づけた。

その一方で、脚付器種の欠如とともに、瑳の多用という特徴をもつことを指摘した。各地に点在する類例などを含めた考察は更に深める必要があるが、階層秩序に対応するものではなく、本墳については、その副葬品に示された生産活動に関わる特徴的な性格が影響している可

能性を考えた。本墳は、地域にとって新来の埋葬施設と埋葬習俗を持ち込んだ、後期群集墳の契機となる古墳である。畿内を中心とした政治権力への新たな象徴性よりも、地域生産の開拓に対する社会的役割を志向するような特質があった可能性も考えておきたい。

本稿の執筆にあたり、中原古墳群研究会において多くの御教示を得たほか、以下の方々に御協力、御教授を賜りました。記して感謝申し上げます。

大谷宏治　草野潤平　白澤 崇　鈴木一有　三原翔吾

註

1　石室の方向については、奥壁側を「奥」、出入口側を「前」とし、「左」・「右」については、奥から前を見たときの方向とする（第168図参照）。

2　歯や骨片の出土については、それぞれ発見された当初の所見に基づいている。しかし、現在では粉状になってしまっていて追認が困難であり、当初の所見も細片によるものが多いことは注意する必要がある。

3　埋葬等の復元に関しては、本書の執筆者による意見交換の内容に基づいて検討したものである。

4　時期については、田辺1966・1981や鈴木敏2004などを参考にして、陶邑編年TK43型式併行期を6世紀後葉、陶邑編年TK209型式併行期の古相を6世紀末葉頃、同新相を7世紀前葉に概ねあたるものとする。

5　西遠江（浜松市など）に事例が認められない点が注意されるが、盗掘などによって残存の悪い古墳が多い地域でもあるため、当該事例が破壊により消失している可能性も考慮される。

6　岩松2010では、出自の差によるという辻村1989による解釈の提示に対して、その当否について具体的な考えを持たないとしたうえで、その可能性を含めて葬送儀礼の上で何らかの意味が付与されている点を評価している。

7　白澤2001などの成果から、3個体程度を超えれば鏃の多用とすることもできる。しかし、追葬が可能な横穴系埋葬施設において、複数組成によるものであれば評価が異なることになる。本稿では、中原4号墳の石室前半部の鏃の個体数から、鏃の多用の基準を5個体以上の出土とした。

引用・参考文献

岩松 保　2010「竪穴系埋葬施設における追葬とその儀礼－横穴系埋葬施設を準備した時代」『京都府埋葬文化財論集』第6集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

大谷 宏治　2001「遠江における横穴墓研究ノート②」『静岡県考古学研究』33　静岡県考古学会

大谷 宏治　2012「宇藤・天王ヶ谷横穴墓群の評価」『森町円田丘陵の横穴墓群』 静岡県埋蔵文化財センター

白澤 崇　1998「組成から見た古墳主体部の副葬土器 - 静岡県・三重県の事例を中心に -」『網干善教先生古希記念考古学論集』同刊行会

白澤 崇　1998「組成から見た古墳主体部の副葬土器 -2」『静岡県考古学研究』30　静岡県考古学会

白澤 崇　2001「土器組成からみた横穴墓」『東海の横穴墓』 静岡県考古学会

鈴木 一有　2000「交易される鉄鏃」『表象としての鉄器副葬』 鉄器文化研究会

鈴木 敏則　2004『有玉古窯』 浜松市教育委員会

田中 良之　2013「墓地に残された人骨から復元する葬送儀礼」土生田純之編『事典　墓の考古学』 吉川弘文館

田辺 昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古クラブ

田辺 昭三　1981『須恵器大成』 角川書店

田村 隆太郎　2008「木棺直葬墳の土器群と葬送儀礼」『森町円田丘陵の古墳群』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

田村 隆太郎　2014「静岡県の後期古墳における脚付長頸壺」『研究紀要』第3号　静岡県埋蔵文化財センター

辻村 純代　1989「箱式石棺に葬られた人々－『同棺複数埋葬』と『二次葬』をめぐって」『考古学ジャーナル』307号

寺前 直人　2005「後期古墳における土器副葬の階層性」『井之内稲荷塚古墳の研究』 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団

藤原 学　1985「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米寿記念献呈論文集』乾　末永先生米寿記念会

古屋 紀之　2008「信濃の中期古墳における土器配置の一様相」小林三郎・大塚初重ほか編『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅲ』六一書房

松井 一明　2004「袋井の群集墳と横穴墓を考える」『地蔵ヶ谷古墳群・横穴群』 袋井市教育委員会

三原 翔吾　2013「若狭・越前地域における古墳出土須恵器」『駒沢考古』第38号　駒沢大学考古学研究室

三好 博喜　1997「鏃の祭り」『太邇波考古学論集』 両丹考古学研究会

前田 健　2007「古墳出土須恵器からみた須恵器の使用者と生産者 - 静岡平野の事例分析から -」『静岡県考古学研究』39　静岡県考古学会

資料文献

網干 善教　1961「御所市森脇吐田平古墳群」『奈良県文化財調査報告』第4集　奈良県教育委員会

綾部市資料館　1997『綾部市資料館報』平成7年度

綾部市教育委員会　1998『京都府綾部市文化財調査報告』第26集

岡垣町教育委員会　1977『東田古墳群』

岡部町教育委員会　1981『内谷古墳群　本郷支群31・32号墳発掘調査概報』

岡部町教育委員会　1982『静岡県志太郡岡部町横添古墳群板沢支群発掘調査報告書』

加藤学園沼津考古学研究所　1972『駿河東原古墳』

加藤学園沼津考古学研究所　1976『駿河石川古墳群第3次発掘調

査報告書』
金谷町教育委員会　1983『駿河山２号墳発掘調査報告書』
岐阜県文化財保護センター　2000『南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡』
久美浜町教育委員会　1983『湯舟坂２号墳』
後藤 守一・斉藤 忠　1953『静岡賤機山古墳』 静岡県教育委員会
佐賀県教育委員会　1966『東十郎古墳群』
相良町教育委員会　2000『大寄横穴群・山下遺跡』
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1976『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
静岡縣　1930『静岡縣史』1
静岡県教育委員会　1975『静岡県埋蔵文化財調査報告』
静岡県教育委員会　1984『伊庄谷横穴群』下（遺物編）
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1997『小笠山総合運動公園内遺跡群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004『田頭山古墳群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『原分古墳』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010a『富士山・愛鷹山麓の古墳群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010b『衣原古墳群　衣原遺跡　衣原古窯群』
静岡市教育委員会　1962『駿河丸山古墳』
静岡市教育委員会　1963『駿河伊庄谷横穴群』 静岡考古館
静岡市教育委員会　1967『駿河堀ノ内山古墳群』
静岡市教育委員会　1983『駿河・牧ヶ谷古墳』
静岡市教育委員会　1984『佐渡山２号墳発掘調査報告書』
静岡市教育委員会　1985『駿河楠ヶ沢古墳群』
静岡市教育委員会　2010『尾羽西山遺跡発掘調査報告書』
静岡市教育委員会　2011『宮川５号墳発掘調査報告書』
静岡大学人文学部考古学研究室　2007『有度山麓における後期古墳の研究Ⅰ』 六一書房
島田市教育委員会　1978『鵜田１号墳・２号墳　法信寺１号墳』
島田市教育委員会　1980『波田１号墳　馬平遺跡』
清水市教育委員会　1984『東久佐奈岐古墳群（3・4・6号墳）・宮平Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
清水市教育委員会　2002『神明山第４号墳』
駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所　1984『笛吹段・兎沢古墳群』
西駿考古学研究会　1968『静岡県藤枝市瀬戸古墳群第１次調査瀬戸地区その1』
遠江考古学研究会　1965『島田市水掛渡古墳群発掘調査報告書』 静岡県
豊岡村教育委員会　1983『押越・社山古墳群調査報告書』
長泉町教育委員会　1974『上出口古墳』
名古屋市教育委員会　1969『守山の古墳』調査報告第二
奈良県教育委員会　1962『大和二塚古墳』
奈良県教育委員会　1972『烏土塚古墳』
奈良県立橿原考古学研究所　1977『平群・三里古墳』
奈良県立橿原考古学研究所　1984『市尾墓山古墳』 高取町教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所　1987『史跡牧野古墳』 広陵町教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所　1993『藤ノ木古墳第2･3発掘調査報告書』
奈良県立橿原考古学研究所　1994『平林古墳』 當麻町教育委員会
沼津考古研究所　1970『本宿上ノ段古墳』
沼津市　2002『沼津市史』資料編考古
沼津市教育委員会　1985『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』
沼津市教育委員会　1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書』
沼津市教育委員会　2006『石川古墳群』
袋井市教育委員会　1997『八幡ヶ谷横穴群』
袋井市教育委員会　2004『地蔵ヶ谷古墳群・横穴群Ⅰ・Ⅱ』
福岡大学人文学部考古学研究室　2003『佐賀県・東十郎古墳群の研究／対馬・サイノヤマ古墳の調査』
藤枝市　2007『藤枝市史』資料編１考古
富士市教育委員会　1981『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　横沢古墳・中原１号墳　伝法遺跡群（伝法Ａ～Ｅ地区）　天間地区』
富士市教育委員会　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』
富士市教育委員会　1990『東平１号墳発掘調査概要』
富士市教育委員会　1999『船津古墳群』
松山市教育委員会　2003『葉佐池古墳』
三島市　1958『三島市誌』上巻
三島市教育委員会　2000『夏梅木遺跡群』
明治大学文学部考古学研究室　2008『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅲ』六一書房
望月 董弘・手島 四郎　1963『駿河伊庄谷横穴墳』 静岡工業高等学校・静岡英和女学院
森町　1998『森町史』資料編一　考古
森町教育委員会　1996『静岡県森町飯田の遺跡』
八尾市文化財調査研究会　1993『芝塚古墳』
由比町教育委員会　1985『室ヶ谷遺跡群』

図出典

第170図　院内乙墳（森町1998）、鵜田１号墳（島田市1978）、笛吹段20号墳（駿府博1984）、宮川５号墳（静岡市2011）、船津Ｌ-210号墳（富士市1999）、清水柳北２号墳（沼津市1990）、田頭山３号墳（静岡県2004）により作成

第172図　衣原11号墳（静岡県2010b）により作成

第173図　牧野古墳（奈良県1987）、山尾北古墳（綾部市1997）により作成

第174図　東十郎特別区イ号墳（福岡大2003）、大室168号墳（明治大2008）により作成